



千厓文庫
文庫24
A951



文庫
A951

南都名所道筋記

全

供養
振舞
...

...

名所道筋記



猿沢池 さるがはのいけ 西の帝 みかど といふまつ 宋女 そうじよめ とりて ま 正 ただ わ わ へ
と と ね ね ま ま といふ い 池 いけ ま ま と と じ じ ろ ろ 一 一 く く なる なる 文 ぶん 王 わう とい
の の ま ま れ れ よ よ お お 不 ふ 一 一 の の け け ち ち ろ ろ に に 行 ゆ 業 わざ 成 なり て て 人 ひと
よ よ ち ち の の ま ま せ せ ぬ ぬ べ べ ぬ ぬ

拾遺集

猿沢池 さるがはのいけ につら につら ぎ ぎ 綴 つづ 母子 ぼし といふ い ち ち かつ かつ ち ち ぞ ぞ ひ ひ 子 こ 海 うみ

奈良入京

と と 果 は なる なる 流 なが せ せ ぬ ぬ 猿 さる 沢 がは の の 池 いけ あり あり ち ち ぞ ぞ 月 つき は は ち ち め め ども ども

宋女宮

池 いけ の の 西 にし の の 方 かた あり あり

衣掛柳

宋女 そうじよめ 身 み と と ち ち ぎ ぎ 一 一 村 むら 衣 え と と 呼 よ び よ け け 舞 ま 一 一 池 いけ の の 東 ひがし あり あり

夫木集

猿 さる 沢 がは の の 池 いけ の の 柳 やなぎ や や 沢 がは 田 た 子 こ が が 稀 ま しく く ち ち れ れ 髪 かみ け け 形 かたち 見 み える える

浅香山 比より東成身蓮のうしろ松叶生るる山と云ふ

浅香山 比より東成身蓮のうしろ松叶生るる山と云ふ

揚貴妃櫻 根中よりいよ一真福寺は玄宗より僧

てうあつーのふさうーよりゆかつかつてり

沈符森 揚貴妃とさうーのむーは敷ら丸符塚と云

菩提院 大徳堂もいよのむーの跡に如來衣れこの

厨子よ入の六児觀音一乘院の傍の竹依上人

いよ僧初徳寺のとりんおんへ毎月糸籠て道

雲の智と物り一人た童子來の當地給位一

をほ長和二月十八日相果たり遠言よよめ

おんてありのむーのむーのむーのむーのむー

くハ森野園梵福もれ徳記よるるはりこの何

世は十三鐘といふ

尾花谷 大鳥居の南あり比方其地をことのみあり

春日大鳥居 け内して毎年十月廿七日淨祭社の前

式このこてあり委ハさうさん

春日古記 柳葉ふゆふて付ておんふがはけの雲霧もふ

光より淨社のわりのすてと雲日野の尾花谷の

霧のり本下をさる雲日野の尾花谷の

飛火野 大鳥居のりおといふの

古今春 雲日野の飛火の野も出てこよ今春のりて雲あつて

馬出橋

大馬の最よりひたの音よりりーとよみ糸乳の
河流橋の馬とけわよりりつとあり

御旅所

春日古記 御旅所 毎年正月は馬本を法沙殿と立回が六日は
人系後して流橋するに本若夫も法乳抱子あり

女ちりあぶら大いん夜より佳馬海り糸乳の次身化は
いまわの流橋人の舞あり相換あり其は還法神

野守池

前後撰叙 春日時、建武の流れる也、余は二三笠の山に橋入月
野守池 法旅不あり其の方さるる不不池の形を

東道

流る川と牽川といふ大の神麻よりり
つものふゆえにり板橋と古に橋といふ石よと

流るると善趣橋といふ

万葉

先より流神あり二乃あり九八四ノ屋地蔵 本設多屋

上ノ屋 尾ノ屋 新造ノ屋 又ケの座といふなり

奥後寺僧 毎日系統して天卜泰平國土安全の流

新流のりまか屋 略く 右本道車屋殿 興

半系物おとゆりさる新に 立位橋あり

春日古記 おとゆり橋よる色の雲立てゆとの神乃法後ととる

二鳥居

春日記の鳥居の丸木も同のまゝありて
後戸社 御徳比咩神なり 神家の石焼籠り

神垣森

風雅集 神垣の森 中葉のちりて
尾右より二あり名の書へけり 普到殿 春日

物仗つことさふ役人ホと著到のせり
藤の鳥居しりし書ふ後のもさるる
ひまもひひまれがみ身よりさるる
松果てははるる

表と表して水後へしとあり

廻廊

穴内待門

御手洗河 芝の門とて入るる
春日の河のちりて

直會殿

法華八徳と後
講屋

神樂所あり

金剛童子社

伊弉 内侍とて入るる
三見宿 相本明神 大山 佐軍神 田心 海本明神 大物

栗平社 大酢 八雷神 いしきも 大々 ち 清殿 のうし あり

院 小社 一庭 あり 南 山 向 の手 雄社 小 の方

飛来天神 天御中 風神社 宜田 大宮御殿 乾 の方 あり

岩本明神 住吉 大文清殿 あり 坤 の方

春日大宮四所

一 御殿

武甕槌命

二 御殿

齋主命

三 御殿

天兒屋根命

四 御殿

姫大神

二階橋門 南 向 清 殿 天 宮 北 向 神 儀 あり

貞享元年と九百十七年 成 祭 仁 明 天 宮 未 祭

二年九月 中 居 新 祭 神 儀 あり 延 と 延 は 延 は 延

初 天 宮 貞 觀 元 祭 十 月 九 日 庚 申 の 祭 初 祭 あり

の月 初 儀 立 六 の 祭 あり 略 く 貞 觀 元 年 祭

貞 享 元 年 と 八 百 六 十 一 年 月 祭 造

祭 あり

神護寺 大 社 お あり 北 向 の 方 あり 延 と 延 は 延 は 延

辛 柁 穴 栗 井 栗 社 儀 あり 南 向 の 方 あり 小 社 西 向

二 階 橋 門 南 向 赤 童 子 清 殿 の 方 あり

如意石 同 あり の 方 あり 保 四 年 は 祭 あり 延 と 延 は 延 は 延

さげり神主徳任大般新一於万座の後と初葉
ぬののこころありしごと

布生橋 女さるの南の方のうしとひ

春日古記ありがたる布生橋と打落り手向の神主さるぞ橋

若宮外院小社 一童子明神 布生橋より南ひーかハ

南宮明神 兵主明神 美々八所殿の小の方あり

若宮一所 天押雲命大明神 云々云々梅りのひて二百

云十六年一月一條院清宮長保元年二月三日

出現中長是也奉孫ト云の所殿へ梅しは

一貞享元年云々百八十二年に成りては

別社遷文翌年保延二年九月十七日祭礼

一梅りともは寛正年中十月廿七日祭礼

小社あり小の遊合神 南の力雄神惣じて長

文の清神ハ神主一家秘祝は云々云々

神ありて毎二月藝の社の事あり云々の能

あり同の神主あり常は云々の考たり

三十八社神日本磐余志島 伊弉諾伊弉册あり

九良氣明神 二十八所の南の方あり 従もの方ある

従ひ又明神上人して傳りともひ

法蓮宮ありと云ひしは云々長久目の式宗祇法行

弁天 乃よりひらひら神のまぐさり

伊社 日前神 五十猛神 大屋姫神 狐津姫神

搜本社 依田彦神 太もも門 西の廻廊 山

青瀧 青龍橋 中間道 詰羅仔橋 地獄谷

梅のりしえのちのり

春日記 青龍の橋とて 神水と清くもろくも 仰身則い

御供所 毎にけりしりし 伊保と 洞とされとくし 伊保に

船戸社 通延 船海とて 守りのりし 池

安君屋 け屋は 白野の法室 紙金泥の

と 洞のふ 夏中門と びと 法入 ねく 女 禁

水屋社 素盞鳥弓 箱田姫 南海神 女なり 爰

毎四月二月八日と 能と 伏見院 法号 世

疫病よ かなや され けり ねとん け ねとん

そ 神水と 奏し 舞曲と あり ぬれ 蓋

まら けのり 恒例と かなり あり

類聚 若草山 水の 赤い 神は 幽を せて 方 ね じれ

若草山 けら たり といふ 毎 正月は 赤色と やく

夫 集 今も ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

洞 ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

七夕の 宮 あり ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき ぬき

利買山 五月山の中よりありありなる山ハ美奈山

計二山とあり

万葉より後醍醐天皇の山とありて北の東は雄子嶋あり

是より東大寺領内ハ八町知りも式百十一石四斗

余坊舎二十ヶ寺ハ宗系子とあり

寺向山 橋の焼たしるの山とあり

新古今に交りぬともありぬ 山にありて神祇の地と

八幡宮 中の法蔵ハ橋大社右ハ殿大社左ハ社切

室屋いすの法寛永十九年焼失しるの地

是の法蔵ハ地蔵とありぬの塔あり是ハ聖武

元々の法蔵とありぬ

新造屋 安河孫一代の出来依阿部池本又切思

のありて善導大師の古徳あり大黒天弁才天

市守長者の持依となり

法花堂 世ふ二月寺といふ良弁僧正建立なりん

不空罽索觀音四天像 東のふ不動明王西の方

地藏菩薩光内室屋の法徳後戸 執金野神

良弁僧正堂 凡の対安室とありてなりき

開くあり 天慶三年平将門板道の対け傍

みびひて陣伏しけり 像忽とありてなりき

控てゆりあり 法徳とありて將門の甲の字あり

より入す一紙一紙のよき事と云ふ。蜂宮といふ

月堂

めんぞんくろんせおんがうの天平橋宮と云

十月貫忠わあまを寺の院分入て却率の

内院の四十九院巡礼を十一面の梅過と勤

徳らる取あり常念親善院と若にわあは

法と徳一人中よゆりそはへ一とあやし

さしひのふ徳を生長れ教善とつは徳ん

者一がころぐ一とひわああといと徳

勤徳せの生長れ徳をより徳ん徳と徳

よりぬき後徳徳はより補徳徳山へじ

出形精勤徳との悪むとて切又か

来かくより事百日計徳と徳は生長の徳

くらんぬ目のある補徳徳山ありの悪ふあて

このふ別尚寺よ安直一とら仏の徳身

してやむとてなり毎二月朔日か十四日まで徳

徳徳神勤徳するゆへ眞鳥守とてゆりさす

呉路のふ利生おありり一とて徳は

ごとく徳法の徳の天平橋宮四年貞亨元年

まじ九百二十二年一徳も時寛文七年二月十

四月子天よ内陳より出火一時炎上す

時の奇瑞一は河内徳の年よ無異成就る

遠敷大明神

堂のうしろの方あり

食大明神

堂のうしろの南の方あり

鬼子母神

安河孫他食寺の南の向よりあり

関伽井

養役の井といふ若死を安明神傳室より

て及場

のやしろの善水といふりへていふ

のふま

対黑白二川の橋儀是れ申の起いで

こころ

の樹はなかりありの被りいふくた

く

井泉といふ出る石といふてあつ

三昧堂

四月考といふ本寺の阿孫他如來あり

公方

橋やこのちり立禪あり

法師也考といふ人遠立といふいぬへの考は被

らりといふあり

良弁故

の弁借正相模也の人なり持腕を官治

といふは誕生あり南寺赤山ありいし金色の鏡

とていふあり六あり杖のうづやなり中は金巻三月

年とて終て系巻といひといひ純金剛神の儀と安

齋一金輪聖王天皇長地又といふ入るれがまね

皇居といふへ外儀のすかありより光といふから

室居と照といふとらといふとほりいし後あり

童子のりめいしとれくはありとていふ

歳とまなび大寺とて成ゆふ實龜四年十

一月十六日八十八日... 念佛堂 在る比茂藤本推守内よ系女といふ也

女あり後りの部をよして... 後葉崎ゆりたすひは境ありに... 代りころは長き尺の比茂... 心は他とゆらぬ世ふ... 突广王あり安河孫他子... 他とや笛吹の比茂あり... あり殿殿の比茂あり... あり殿殿の比茂あり... あり殿殿の比茂あり...

後乗坊重源佛殿 徳久二年六月又日入滅春秋八十六

鐘樓 口徑九尺一寸三分... 用契銅入方二子六百八十寸

阿波民部重能石塔 同南の方といふ... 藤本推守石塔 在る比茂藤本推守内よ系女といふ也

義朝公頼朝公後宗坊 石塔あり... 大佛殿 法跡座高長八丈二尺八寸

天平十八年大仏像... 天平十七年...

取執りしりさりしりさるる大皇教念儀に於ては
すして徳玉へ勅使をつりて務師の良巧哉
求給つり勅使義徳必雄総といふ所も
よき事子教由牛よき事かひたりを中一人の
奇音をもて故勅使とあやしめられ哉の帝は
勅使あり十六丈のき容と務しむ務師の良
すと求むりさりとこころへ給へ童子杖と持て
河原の砂よ相好あ海の秋の儀と一町に
ふまてこそせり勅使とあやしめ相具して
ゆり参向と教感ありて後上の入位とさづけた
まりの天皇傍に又大仏と務あしめ
べしりありに徳童より中徳玉の物かわり
靴がくしり百人僧侶と侍と徳玉とけり
同と徳玉とそ大皇と執りまは耐重をひり
うて女又人の侍師来現一彼童子とさるに徳しり
中さるにうの洞石足なりしり童子やう一人
の僧侶の柄者名と入る張の鑑の中へ投入し
後へとさるに侍の貴一河は投入し足さるして
乳色小けり女又人の侍師ま切終り大仏はの玄武
山へ飛掛り西とさうしてさるに徳玉と立て女
入所の明神と崇むり大仏殿造りの徳玉へ勅
使と下され巧匠の者とめり徳玉に徳玉をいり

縁記

のわかん飛下坂... 飛掛ぬとて... 社とて入る余... 大仏供養... 守師... 相傳て守師... 基井とて... 玄壽雅承... ともく入... 縁記

縁記

天平勝寛四年... 皇の孝... 守師... 大佛... 僧... 二百人... 勝宗元年... 貞亨元年... 十二月... 弘安元年... 色... 縁記

百氏とてその日小奇色物書也二年四月十九日流
うと勝身勝降ハ陳和挂日本等致元佛降ハ
康平運を定免候と云工ハ修務出物納る聖格
徳玉宗より又治元は八月廿七日太上法皇御幸より
自願書の是代は光也法周服ありともは建久六年三
月十二日信長寺降ハ真福寺別当権僧正元憲咒
願降当寺別当権僧正勝堅も亦信所孫本天宗の
供養に異れ約二十万騎と奉大仏と三尊二尊復
せり貞享元年と云元九十年は永保十の十月
十月松永孫正共史として大仏殿焼亡せり貞享元
年と云元十八年成り殿の事十八又十六尺堂の

西四九の南三十一石廻廊東西ハ十八石南ハ石

子安明神 良和母と云ふ大仏西の方あり

受戒堂 聖武天皇御宇鑑真和尚大竺那密宗也

の戒壇のかとてつさる大仏西の方あり

戒壇院も西の方あり

真言院 大師法教堂地蔵堂小野堂の他長生殿

云の福のふ名井あり護法善神守護よ立

たまふ足跡のるあり

東南院 け西は正法寺佛もたまふあり云は詭首の

地あり

南大門 二玉あり月か三双なり天平年中造るあり

宜寸川 長城川より南大門のあたりにあり

万葉云 名は長借を長城川のしめありぬいしかぬ

氷室社 中園鶏稲置大山主大神 東山神 西木神

指子神 浪糸といひなり 守敏僧都の遺事なり

車輪橋 三つりけのありのちよらに橋をなすと後

なり

奈良宗お仰人自も絶び切約の踏をそりせとるなり

雲井坂 ころろとのりよりふの小坂といふ

奈良宗お仰人自も絶び切約の踏をそりせとるなり

真福寺東門をへての寺のち四下知行る式万子百

十九石外余両ち門の扉をいかにあり

観禅院 集會堂よりふ中なるあり

初日の三十條とこなり 東田堂の寺のおあり

ころろとのりよりふの小坂といふ

いみ合のち此のちなるあり

食堂 中なる子なるあり

のち十一面不空羅索二并あり 淡海云建立

とありふありハ細殿といふあり

とありふありハ細殿といふあり

とありふありハ細殿といふあり

東金堂 中なる業師 眠士日光并月老并金銀あり

梵天帝釈四天王十二神將 下なるあり

神龜三年七月元正天皇依清暢聖氏天皇御遷
立貞享元(延喜)九百八十九年(延喜)又(延喜)の(延喜)金
洞初迦服士親善虛空藏(延喜)又(延喜)延喜天皇
八年十月新羅(延喜)より(延喜)けり(延喜)波斯(延喜)臣(延喜)
(延喜)又(延喜)守(延喜)護(延喜)の(延喜)め(延喜)猿(延喜)比(延喜)の(延喜)比(延喜)より(延喜)あ(延喜)り
ら(延喜)せ(延喜)る(延喜)ふ(延喜)又(延喜)板(延喜)松(延喜)の(延喜)十(延喜)二(延喜)神(延喜)ハ(延喜)弘(延喜)法(延喜)大(延喜)師(延喜)他(延喜)大(延喜)黒(延喜)天(延喜)あり
五重塔(延喜)ハ(延喜)一(延喜)葉(延喜)作(延喜)ハ(延喜)室(延喜)生(延喜)西(延喜)あり(延喜)又(延喜)南(延喜)ハ(延喜)板(延喜)地(延喜)不(延喜)登(延喜)武
天皇(延喜)御(延喜)初(延喜)天(延喜)平(延喜)二(延喜)月(延喜)遠(延喜)立(延喜)る(延喜)廿(延喜)八(延喜)日(延喜)一(延喜)尺
貞享元(延喜)迄(延喜)ま(延喜)す(延喜)九(延喜)百(延喜)八(延喜)十(延喜)八(延喜)年(延喜)也
月日宮(延喜)ハ(延喜)六(延喜)年(延喜)分(延喜)敷(延喜)あり(延喜)と(延喜)け(延喜)り(延喜)也(延喜)ハ(延喜)一(延喜)尺(延喜)也(延喜)ハ
大湯屋(延喜)登(延喜)り(延喜)て(延喜)大(延喜)に(延喜)成(延喜)り(延喜)ま(延喜)り(延喜)る(延喜)也(延喜)ハ(延喜)一(延喜)尺(延喜)也(延喜)ハ

年(延喜)山(延喜)嶺(延喜)の(延喜)貞(延喜)享(延喜)元(延喜)年(延喜)と(延喜)入(延喜)百(延喜)六(延喜)十(延喜)八(延喜)年(延喜)也(延喜)ハ
弁(延喜)天(延喜)巽(延喜)の(延喜)方(延喜)あり(延喜)り
南大門(延喜)二(延喜)王(延喜)あり(延喜)け(延喜)り(延喜)也(延喜)ハ(延喜)二(延喜)月(延喜)六(延喜)日(延喜)分(延喜)十(延喜)四(延喜)日(延喜)を(延喜)新(延喜)の
柱(延喜)を(延喜)四(延喜)柱(延喜)後(延喜)志(延喜)相(延喜)勅(延喜)ら(延喜)る(延喜)天(延喜)下(延喜)泰(延喜)平(延喜)由(延喜)去(延喜)安(延喜)全(延喜)の(延喜)因
縁(延喜)あり(延喜)清(延喜)和(延喜)天(延喜)皇(延喜)貞(延喜)親(延喜)十(延喜)日(延喜)の(延喜)り(延喜)と(延喜)り(延喜)也(延喜)ハ(延喜)一(延喜)尺(延喜)也(延喜)ハ
元(延喜)年(延喜)ま(延喜)す(延喜)九(延喜)百(延喜)十(延喜)七(延喜)年(延喜)也(延喜)ハ
中(延喜)明(延喜)全(延喜)剛(延喜)力(延喜)士(延喜)の(延喜)二(延喜)堂(延喜)子(延喜)あり(延喜)服(延喜)立(延喜)夜(延喜)又(延喜)神(延喜)云(延喜)孫(延喜)也(延喜)ハ
中金堂(延喜)丈(延喜)六(延喜)尺(延喜)迦(延喜)如(延喜)本(延喜)服(延喜)士(延喜)藥(延喜)王(延喜)藥(延喜)上(延喜)五(延喜)尺(延喜)也(延喜)ハ
幢(延喜)の(延喜)四(延喜)并(延喜)四(延喜)天(延喜)皇(延喜)像(延喜)遠(延喜)文(延喜)の(延喜)像(延喜)結(延喜)ハ(延喜)撰(延喜)成(延喜)入(延喜)唐(延喜)と
像(延喜)一(延喜)路(延喜)ひ(延喜)る(延喜)ん(延喜)の(延喜)り(延喜)と(延喜)り(延喜)と(延喜)め(延喜)ら(延喜)し(延喜)道(延喜)足(延喜)の(延喜)表(延喜)也(延喜)ハ
ち(延喜)と(延喜)と(延喜)ま(延喜)す(延喜)て(延喜)丈(延喜)六(延喜)の(延喜)尺(延喜)迦(延喜)の(延喜)像(延喜)と(延喜)像(延喜)と(延喜)り(延喜)と(延喜)り(延喜)也(延喜)ハ

書

中一して入森とららぬ天智天皇八年獲之
薨一のひてほゆ十二年目内大臣正宿淡海公遣
之秋洞三年依本長七家花家公のまを授けしや
孫治のりて輝貞享年九百七十八年
夫六あまのころる四天王傳文殊維多
入大カ長恩の大臣の建立武智磨の女并
く母のあるよ天平七年遠立のり一貞享年
まもて九九百八十年維多舎しけ老ま
けりけ澄觴ハ大織冠病悵子おられ今と
ざりといへるのひらう村百海の法船とり
て續編一強は古病治のりて
一ふと續編ともいふと強はれ大臣の
病もといへるよ大臣生く母け大臣に依
まんとらうひりし和洞七年は淡海公奥に
きて今ふたゆり奉り

東

東、鞍樓西、鐘樓のり又東室、西室、小室、これハ
具、福寺衣僧いみへ別院をもつて附けしは
しけり今も維多公のまはち例あるくをひ

小圓堂

小圓堂、中、梅、白、隸、仁、空、号、なり、あ、太、ハ、金、忍、母、親
四天王傳元明元正のま帝陵海云の由る

養老八年八月三日涉入里う真享元

九百六十四年

西金堂

中尊丈六杖迦如来十大弟子九准朕
觀音如意輪觀音業師梵天帝尺地苑右

十一面觀音楊柳觀音之方龍神天就八下空

天姥就姥南陸赤といふ妙幢并羅膝羅考

二王安所依他四天王觀弘法大師他自持誦お観

親ありけ雲六光明皇居法母橋公住生雲花の

古为天平六年正月十日小造立供養真享元

として九百六十四年成ける傳の臨鶴八天竺健

養子の中尊光少皇居と撰とせんそれこそハ

方の観音と若さ色のよ夏見て見たりかるまへ

もなげまへ仏師とめいさうつりなりゆきと

親と信日中へとりけしと養子こそ時光の皇居

中母のなるは伝傳と造らん者汝傳へしと此別親

此の傳と別眉間のむと入るとり此眉のるも

光明ともらぬ信作やまがく白毫と入るも

厨子の内の自持誦おのくらんおん八喜慶と云傳

かもこのの南うしたの心とるごとく喜慶と

勢ありきぬりやうは親を田中小御座を

又うましくおひおひもの南大門はまへ

又うましくおひおひもの南大門はまへ

又うましくおひおひもの南大門はまへ

又うましくおひおひもの南大門はまへ

又うましくおひおひもの南大門はまへ

又うましくおひおひもの南大門はまへ

又うましくおひおひもの南大門はまへ

僅一安忍の費とてこれに動給はば西
金堂へうつりてあるはこれなりと入世の
ありがごとく天竺の法皇に正法院は華原
のり十二個子あり

南圓堂八角室の丈六の二目八臂不空羅索の

くらんおん花の肩は麻の皮とけさせありて四
王像ありて是れは長恩大長阿闍梨
常の志とて弘仁四年遠立之貞尊元

年すて八代七十二年成六祖師に
但作の法苑珠林に於ては

燈臺ありけは後には野大師池に
補色法の南に於て今ぞとて

聖天宮一言主社大なる成石入りあり般若波羅密の

窟弁女天咲陽天宮乃由弘仁年中は天

弁女天は糸籠一南島寺建立の年
のりゆは生男の字は神政

大師の成六眠宮といふなり
元真寺ハ推古天皇は宇志の帝教造立

法皇の御下より今ハ後よのころ入道の
塔堂一宮のこけきり塔のたのこ女田文の
大日如来堂の本まはらんおんおり

女らの所集り古なりぬ維新板外
或者解蒙而之腐成段亦不成蒙
味使然事頃儲此こま新
今甲板竟

貞享元年八月十五日

南都橋本町

